

〈焦点1〉

専門家（看護師）の立場から

「メモリアルキルトを通していのちのつながりを考える」

寺口淳子

メモリアル・キルト・ジャパン代表 AIDS&Society 研究会議理事
訪問看護ステーションぱあとなあず南所長

Contemplating the Connection of Life through Memorial Quilts

Junko Teraguchi

キーワード

エイズ

メモリアル・キルト

AIDS

memorial quilts

看護に関わって50年近く、ターミナルケアが一番のテーマであった時期にメモリアルキルトの存在に出会い、一時期ボランティア活動に専念する。復帰後も活動を続け、看護の最終現場を訪問看護として選択し現在に至る。今回は、一人の少年のメモリアルキルトについて語らせていただく。

I. メモリアルキルトとは

AIDSで亡くなった人の存在を1枚の布に表したものである。大きさは90cm×180cm、人が横たわれる等身大の布にその人の名前、衣服や好きだった物や親しい人々のメッセージなどが縫い付けられている。

1987年サンフランシスコのTHE NAMES PUROJECTで始まった動きは世界中に広がった。

II. メモリアル・キルト・ジャパン (MQJ) の活動

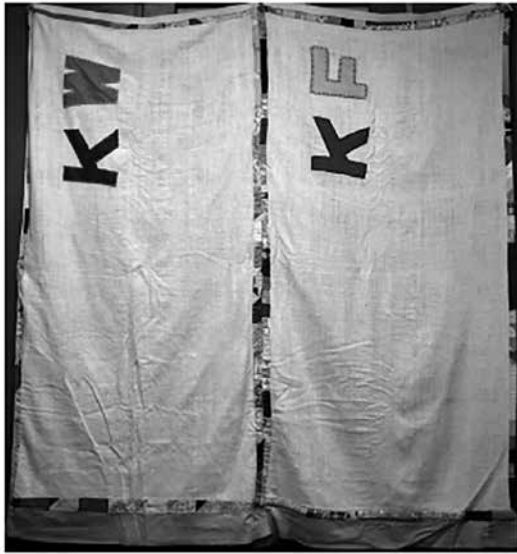
MQJは1991年、THE NAMES PUROJECTから192枚のメモリアルキルトを借り受け、全国9カ所で巡回展を企画、実行委員会組織として発足した。巡回展の間に日本でもメモリアルキルトが作られ始

める。

薬害エイズ訴訟の現場でもキルトを掲げ、亡くなった方々のキルト作りの支援も行い、多くの教育現場やエイズ啓発の場でキルト展示を行った。

III. 「野球少年のキルト」ができるまでとその後

日本では血友病の方々が、アメリカから輸入された非加熱の血液凝固因子製剤によってHIVに感染させられた。国、製薬会社に対して1989年責任追求、真相解明、救済補償で裁判を起こされたが、1996年の和解までに多くの方々が亡くなりました。NAMESのキルトを見て、仲間のキルトを作りたいとご自分の血液を赤絵の具に混ぜて愛の文字を書かれた赤瀬範保さんのキルト、ご夫婦のイニシャルが縫い付けられたキルト等。原告団とともに活動されている遺族の会で息子さんを亡くされたお母様からキルトを作りたい、と相談を受けた。当時、新大阪にあったMQJ事務所までお母様に来ていただき、作り始め、1か月に1回のペースで約1年を要した。



日本で最初にできたメモリアルキルト
ご夫婦のキルト



大阪訴訟原告団長
赤瀬範保さんが作った愛のキルト

IV. グリーフケアとしてのキルトの役割

差別・偏見の中で自分が、家族が当事者であることを発言できない苦痛は計り知れない。亡くなった方々を統計上の数字でしか表現できなかった時期に「名前」を出すことの意味を、キルトを通して伝えていきたい。

キルトを作っていく空間は、守秘義務の上に成り立つ信頼関係、そこでならお互いの思いを気にせず語る場であり、同じ立場の人が語り合えるピアカウンセリングでもある。その中で「野球少年のキルト」は作られた。語り合い聴き合う中で作り上げる行為は、関わっていく人それぞれの悲しみを受け止め合い、癒される空間となる。

V. いのちのつながりを忘れない、つなく、つなげるメモリアルキルト

大切な人が生きていたことを忘れない、記録する方法は写真や絵、文字など色々あるが、メモリアルキルトもその一つである。布で表す、親しい人々が一針一針縫い付けいくことに思いが込められる。キルトと出会うだけでキルトが語りかけるものに耳を傾けその人の存在を知る事ができる。



1992.10 インターナショナル ディスプレイ

- ワシントンDCモール公園に掲げられたメモリアルキルト、2万枚を超えるいのちの記録
- 日本で作られたメモリアルキルトを持って参加
- 90cm×180cmのキルトが8枚縫い合わされ1セットとして4セット分がケーブルタイでつなぎ合わされている
- 3日間の中に亡くなった方の名前が読み上げられる
- モール全体を歩きキャンドルパレードも行われた